

中等学校の正課として取り入れられ、一般の人々の間でも盛んに行われるようになりました。太平洋戦争後、しばらくのあいだ禁止された時期もありましたが、昭和二十二年には全日本弓道連盟が設立され、その後順調に弓道として広く普及し、今日では競技人口が四十万人を越えるほどになりました。

志太の矢師・かけ師の歴史

矢師とは矢を作る人、かけ師とはゆがけを作る人を行います。現在、志太地域には、全国的に見てもかなり多くの矢師や、かけ師が活躍しています。その職人の祖をたどっていくと、矢師系統図や、かけ師系統図を見てもわかるように、もとは同じ「加藤平七」さんの流れを汲んでいることがわかります。

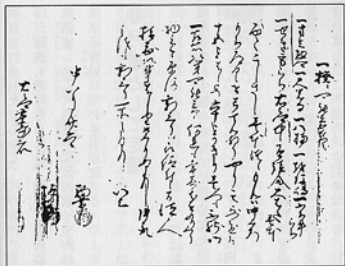
加藤家はその昔、甲斐武田の家臣でした。

ところが、平七さんは武士を嫌って矢師にな

徳川家康が戦った小牧・長久手の合戦のとき、家康は駒井勝盛（御小姓）・坂本貞次（田中城二の丸衛・山西代官）兩名に命じ、焼津市の方ノ上、大覚寺、八幡、越後島、策牛、関方など六カ郷の年寄衆に働きかけ、出兵のため手薄になった駿河の守りを固めるため、十五歳から六十歳までの農民に、弓・鉄砲・槍などを持たせて兵力として動員しようとしていた事実が、焼津市石脇の原川家に「駒井勝盛坂本貞次連署状」として残っています。また、江戸時代になると、人々の間に遊藝としての弓術が流行し、時折、神社などの祭典でも金的を射止める競い合いが行われました。このような背景の中で、志太地域には、弓道具職人が集まりました。

加藤家の矢師一本の系統に、もうひとつ、かけ師の系統を加えたのが加藤善作さんでした。善作さんは、京都のかけ師を焼津に招いて「ゆがけ作り」の指導を受けました。それ

り、今川の時代（一三〇〇年代～一五〇〇年代）甲斐から駿府（静岡市）に移り住んだのです。その後、代々矢師が受け継がれ、矢師「平三郎」という名も継承されていきました。志太の弓道具の歴史の中で注目される事実として、天正十二年（一五八四）豊臣秀吉と



駒井勝盛坂本貞次連署状

を助け、その後を引き継いだのが、二代目平三郎さんの三男であり、善作さんの義弟にあたる加藤善平さんでした。この後、加藤家は、矢師とかけ師の二つに大きく分かれます。嘉永年間（一八四八～一八五四）には、焼津市小川の矢師・二代目加藤平三郎さん、かけ師・加藤善作さん、同中新田の矢師・加藤松太郎さん、藤枝市本町の弓師・青嶋金治郎さんの四人で、ひとつの組合を作っていました。現在この平三郎さん直系の流れを汲む矢師・小池良夫さんが今でも愛用している古い道具箱に、この四人の名前が記されています。

武士の時代が終わった明治時代（一八六八～一九一三）の始め頃は、新政府のとった欧化主義などにより弓道は下火となり、仕事のないときが続きました。ところが大正時代（一九一三～一九二六）から昭和時代（一九二六～一九八九）初期にかけて、中学校以上の学校体育や課外活動の一つとして弓道が